
魔法先生ネギま！アンチなにそれおいしいの

神白漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

人生を歩んでいくお話です。

プロローグ（前書き）

初投稿です。温かい目で見てください。

プロローグ

初めまして。俺の名前は天年翔。年は、18。今年度で高校卒業のはずだった。なんで、過去形なのかって？

それは・・・・・・・・・・

俺がさつきしんだからさ（笑）いや、笑えないよ。死にかたが虚しいですよ。進学校の生徒の朝は早い。なぜなら、補習という名の拷問があるからだ。真剣な話、朝の7時半に登校とか俺に死ねと言ってるのか？まあ、もう死んじゃってるんだけどね。で、今日俺は珍しく寝坊してとても急いでいたんだけど、やはり朝食は食わんといかんやろ。だから、家のババアに「朝飯」て言ったのよ。え、反抗期かって？いや、もうねそんなもの小学生の時にすぎました。でも、ババアも寝坊で、なんも作ってなかったから、バナナを食べたわけよ。それで、食い終わったバナナの皮を投げてしまったのが、運のつきやった。そう、俺は急いで学校に行こうとして、バナナでを・・・・・・・・・・滑らせなっかたんだ。えっ、そこはすべろよ、だって？うん俺もそう思うだって俺の死因は葱を踏んで、

転んで頭を強打してしんだんだ。絶望した！足を滑らせた原因が葱なことに絶望した！と、当初はあまりの残念さに、周囲の状況にきづかなかったのだが、落ち着いてみると、俺は驚愕した。だって、目の前に土下座している幼女がいるんだぜ。お兄ちゃんビックリ！

「あの、なんで君は土下座してるの？」

「本当に、すいませんでしたー！！」

What!?

説明中・・・

「つまり君は神様で俺の書類（人生）の幸運を誤って最低ランクにしちゃったら、俺死んじゃったわけ？」

「はい、そうです。ごめんなさい！」

「神様なんで、なんで俺の死因が葱なんですかー!!!!」

「ええー！怒るところそこ！・・・原因はあなたの母親が昨日使った葱を外に出していたからです。」

「あの・・・くそババア!!!!（全国のおっかさんすいません）」

主人公暴走のため次回に続く？

「続かんわ、ごめん神様取り乱して」

「いえ、誰しも叫びたい時があるものでしょう」

なにこいつ、お前が一番の原因だ。で、結局なんで俺はこんなところにいるんだろ？

「それはですね、私のミスであなただけを不幸にしてしまったため転生してもらったか？」

転生？あの輪廻転生のこと？

「まあ、そう捉えてもらって構いません。つきまして何か要望はありませんか？」

「要望て何を？」

「例えば、NARUTO写輪眼とかブリーチの斬魄刀とかですよ」

「つまりアニメや漫画などの技や能力などを要望していいということか。なあそんな能力が必要なほど危険な世界なのか？それといまさらだけど俺の転生場所てどこ？」

「そうですね、まあまあ危険でしょうか。それと転生場所は『魔法先生ネギま!』です。」

「俺はねぎに恨みでもかっているのか。」

「それで、要望はどうします？」

「そうだな、まずは俺の幸運ランク、直感ランクをEXにしてくれ。」

「へえ、そこから行きますか。はいいいですよ。」

「で、次に『伝説の勇者の伝説』の全ての式を解くものと全ての式を編むものをあわせた、ライナ＝エリス（寂しがり屋の悪魔）をくれ。もちろん代償なしで頼む。」

「これは、チートですね。でも代償はなしは無理なので、魔力の消耗ですね。」

「ああそれでいい。後これが最後なんだが『D・Grayman』のノアの能力をくれ。これは人間を殺したいとかの殺人衝動を抑えてくれ」

「はい、わかりました。わたしもその漫画好きですから、力入れて頑張ります。それじゃ、新しい人生たのしんできてください。」

「ああ、神様ありがとな。」

そういつて俺の意識は闇へと沈んでいった。

Black out，，，

プロローグ（後書き）

主人公チートですね。私は自重しませんので。

次回、主人公の転生先がわかります。では、よろしく。

ここは田舎です。(前書き)

なんとか、書き終わりました。では、どうぞつたない文章ですが
お読みください。

ここは田舎です。

ここは、どこなんだろう？意識が戻り周囲の状況を確認したところ自分が縮んでいた事実には驚愕したよ本当。あの幼女神、赤ちゃんからやり直す言えや。ということ、ベビーベツトから周囲を見ることが叶わず、睡魔に襲われそのまま目を閉じていった。お休み。

五年後・・・

いやあ久しぶり。自分の新しい名前とここがどこなのかわかったよ。あの後、うちの母ちゃんに起こされてビックリ、母ちゃんマジ美人。で、どうやら俺の名前はマギ・スプリングフィールドというらしい。うん、外人さんだね。で、ここはイギリスのウェールズの森で魔法使いの隠れ里らしい。俺さあ『魔法先生ネギま！』の原作で知らないんだよね。だから、最初、村で人が飛んでいるのには腰を抜かしてしまったよ。題名に魔法であるじゃないかって、勘弁してくれよ、一般ピーポーだった俺に、空飛ぶ人間や擬似雷落とすやつ見たら、わあファンタジー何てのんきなことってられません。

あ、能力だけだね、神様は約束守ってくれたよ。まず、幸運と直感だけど、新しいお母様、下の弟を産むとき、産んだら死ぬってお医者さんにいわれてたけど、滅茶苦茶神頼みしたら、すぐく安産でした。これおれのおかげじゃない？後、直感だけどだいたい何か自分にとって都合の悪いことが起きるのがわかるよ。うん、これは本当に助かる。

次にライナリエリスだけど、これはやばい。ありとあらゆる構成式が見えるし、一回全てを解く式で森の木を解除したら制御できず

に森の木全部消してしまい、あわてて全てを編む式を使って修復したよ。そのとき、軽い脱力感に襲われたんだけどこれが多分代償の魔力消耗なんだろうと思いました。

最後にノアの能力なんだけど、3歳ごろ死ぬほどの原因不明の高熱に襲われ1か月悪夢にうなされたよ。で、世界の終焉だの人間を殺せ殺せとうるさかったけど、神様がちゃんと殺戮衝動を抑えてくれたらしく、暴走することなく目がさめたよ。で、そのあと顔を洗おうとしてこちらの世界にきて何度目かわからないけど、口をぽっかーんと開けたままのあほ面してしまった。そういや、神様、D・Gra'力入るって言ってたっけ？しかも俺、容姿がティキミックスなんだよね。変な所まで似せないで欲しい。だって、鏡見たら額に聖痕が浮かび上がっていたんだもん。母さんにえらく心配してきて宥めるが大変だった。でも、抱きつかれたときに胸が当たった時は役得とか思ったけど。で、高熱出した後ノアズメモリーのおかげなのか、力は簡単にに使えた。お気に入りには快楽のメモリーかな。空気の足場をかためて空を飛んだ時自分も脱一般人になってしまったこと自覚し、少しだけ寂しかったといっておこう。

「兄貴ー！飯らしいぞおー！母ちゃんが来いって。」

うん？考え事していたらいつの間にかこんな時間か。

「わかった、今いくよ、ナギ」

続く！

ここは田舎です。(後書き)

かなりのご都合主義ですね。ナギの兄さんとしてがんばります(笑)

定時連絡です。（前書き）

今回は少し短いです。ではお楽しみを。

定時連絡です。

やあやあ、朝の人にはおはよう、昼の人にはこんにちは、夜の人にはこんばんは。みんなのヒーロー、マジだよ。えっ、みんな、そんな悲しい子を見るような目で見つめないで！

ごっほん、ふざけすぎてすみません。この世界に産まれて早十年。うん？進むのが早すぎるだって？これは、大人の事情です。いい子、悪い子関係なく、深く突っ込まないでくれると非常にうれしい。

5歳のころから、魔法使いとして修業初めただけで、大方の魔法は使えるようになったよ。まあ、魔眼のおかげなんだけど。でも、魔力制御は大変だった。俺は、先天性魔力超過現象という病気で、普通の魔法使いの三十倍の魔力保有者らしい。そのため、子供のころにはその魔力には耐えられないので、『ハーメルス（神を縛る紐）』というマジックアイテムで一般魔法使いレベルまで抑えている。それでも、本質の魔力量は変わらないため制御が大変。完璧にできるようになるまで三年かかった。

後、気なんだけど、瞬動、虚空瞬動ぐらいでほとんど手を付けてない。それより魔法が楽しくてしょうがない。術式がわかるおかげか、パズルのように入れ替えたり組み替えたりしているうちにはまってしまった。そのため、周りに魔法オタクとよくからかわれる。

周りといったが、うちの村はそこまで大きくないため、子供の数が俺とナギ後、年の離れた兄を含めて、5人ほどこかない。そのため、俺とナギという小さい子供はまるで村の子供の用に扱われ、悪さばかりするうちのおバカな弟は近所のスタンおやじにいつも

怒鳴られている。

俺はどうなんだかって？前世は後少しで社会人な人間が子供のあふれるパワーにはついていけません。しかも、うちのマリア母様は病弱なため、なるべく大人しくして、家からあまり出ません。えっ、このマザコンやろうですって？失礼な、その通りです。だって、荒ぶる炎のように紅い滑らかな髪でありながら、今にも消えてしまいそうな儂げな微笑み。これを女神と言わずして何と言う。と、まあ楽しんでるおれです。

side out

マリア side

私には三人の息子がいる。長男はもう立派な大人で村を離れて仕事をしている。今私はマギとナギの子育てが大変。ナギは活動的によくイタズラをしては、村長のスタンさんに怒られている。マギはナギと違いとても大人しい子で病弱な私をよくサポートしてくれる。最初のころはいろんな病気にかかったりして大変だったけど、いまではナギの面倒をよく見てくれるいいお兄ちゃんだ。それに、勉強もよくできとても優秀だ。だが、あの子の魔法関係に関してはいまだに苦勞が絶えない。五歳のころ初めて魔法の初歩『プラクテ・ビギナル（火よともれ）』を唱えさせたら、火炎放射のように火が出て危うく家が燃えそうになった。そこからは、まず魔力制御に力を入れながら教えようと思った私は悪くないと思う。しかし、マギは天才だった。一度教えた魔法はすぐに覚えてしまい、しかも現存する魔法をより効率よくしたり、威力をあげたり、さらには新しい魔法まで作ってしまった。しかもその作った魔法がえげつない。魔法反射てなに！？アンチマジックフィールド？魔法が使えないじゃない！ととんでもないものを作っていく。たぶん本国やアリアドネー

の学者たちに見せたら腰抜かすわね。まあ、このように私の可愛い
エンジェルちゃんマギが天然魔王に見えるのは気のせいじゃないよ
ね？はあく私この子の育てかたどこで間違ったかしら。

s i d e o u t

定時連絡です。（後書き）

いやぁ勝手に解釈してしまいました。お母様の名前ありきたりですがどうですか。

やはり、シンプリーズザベストだと思いました。

とうかナギの母親はどうなっているのかわからなかったので勝手に改造しました。

では次回はいよいよ冒険のプロローグです。よろしく願いします。

旅は道連れ、俺は拉致られ!?! (前書き)

本日二度目の投稿。

よろしく願います。

旅は道連れ、俺は拉致られ!?

三人称 s i d e

ここはメルディア魔法学校。旧世界において小学生程度の子供たちに、魔法と一般教養を教える機関。また、裏を返せば「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」つまり、メガロの忠実な犬を育てるための場所である。

そこに二人の天災がやってきた。二人は今校長先生に怒られている。

「アニキ俺眠たいんだけど、寝ていい?」

真っ赤な髪を持つ兄弟のうちのアホ毛の弟が、目をこすりながら自分の兄に尋ねている。

「駄目だ、今はとにかく爺の話聞いとけ。聞かないと癩癩を起して説教が長くなる。」

前半だけ聞けば、優等生だが後半ですべて台無しである。

「これ! マギ! ナギ! 儂の話を聞いとるのか! !」

「聞いてない。」

「うがぁー! !」

今日この二人がここに呼ばれたのには理由がある。弟のほうは座学が大っ嫌いで、授業は抜け出すは、教師に雷の上位古代呪文『千の雷』をぶちかましたりと問題を犯し、兄のほうは成績は優秀だが、優秀過ぎて周りがついてこれず、ついには一人の魔法教師が自信をなくし、田舎に帰ろうとするなど、二人ともアプローチは真逆だがかなりの問題児らしく、他の教師では手におえないため校長室に呼び出された。

が、二人の問題児よりはすさまじく校長も、もうゴールしてもいいよね、安西先生、とフオフオフオの白髪のぽっちゃりの幻覚が見えたらしい。

「ナギ、どうしてお前は教師に魔法を唱えたのじゃ。魔法は危険なものとかわかってるじゃろうに」

校長は気を取り直して少し咎めるように少年に聞く。

「だって、あいつ俺が魔法が覚えられないのバカにしゃがったんだぜ。しかもアニキの名前まで出してきて。だから、ついカツとなつて、、」

ナギは最初は怒りながらしかし、後から自分がしたことに対し反省し気落ちした声で喋った。ナギには一つ違いの兄がいる。兄は本物の天才だと思っている。魔法の腕、戦闘術すべてにおいて自分より強い兄を尊敬していて超えたいと思っている。一体お前はどこの戦闘部族だと突っ込みたい。

校長も今回のことはナギだけが悪いわけではなく教師にも責任があるとかかった。後、マギの無自覚天災のせいでもあるが。優秀なものは何かと僻まれるがマギに至っては、魔法ではこの学校で右に

出る者がいないバグ。そのため、僻みがナギに降りかかっているのが現状だ。まあ、術式無茶苦茶な状態で千の雷を発動させるナギも十分バグだが。

「まあ二人ともこの学校に少しずつでいいから慣れていくのじゃ。友達を作るでも何でもいいから楽しんでいきながら大人になるための準備をなさい。さあ明日も早いからのおく。ここらでお開きじゃ。気を付けて帰るのじゃぞおく。」

俺精神年齢大人なんだけど、と思いながら何ともしまらないマギがいたらしい。

side out

ナギside

おっす！俺はナギ・スプリングフィールド、最強の魔法使いだぜ。ま、まあ兄貴には勝てないんだけど。はあくだいたい魔法合戦したら確実に負ける。近接戦闘に関しては身体能力では勝てるけど、アイキドウ？だとかいう、日本の武術でいつの間にか倒されてるし。それで兄貴にあって、日本の格闘術を知っているのか？て聞いたらすごく焦っていたけどなんでだろう。まあなんか旅の人に教えてもらったって言ってたけど。それで納得した俺を見てこいつがアホで良かったって聞こえたのは聞き間違えだろうか？

しかも「情報は命だ」が信条らしくなぜか聞いたらほとんど答えられる。何でも知ってるんじゃないか？と言ったら何でもは知らない、知っていることだけだといって、その後俺は厨二病じゃない、厨二病じゃないと悶えていた兄貴は気持ち悪かった。

で、結局兄貴には全くかてねえ。だけどいつか必ず勝ってやる。
そのためには・・・

side out

マジside

家に帰ったら、母さんにも怒られた。ナギは「あらあら」とほんわか注意だったけど、なぜか、俺だけは「お願い自重して」と頼まれた。異様に母が疲れているのは気のせいだろうか？母さん大丈夫？と聞くとあきれた目で見られた。少し寂しかったのは言うまでもない。

魔法学校に通ってから思うことなんだけど、俺は全然この世界ことを知らない。いや正確には裏社会の現状を知らない。情報はあらゆる富より価値があると俺は思う。どうにかして、世界のことを知れないだろうか。そんなことを思いながら日々の訓練をしていた。

朝、目が覚めたら俺は我が弟に拉致られている。何でも魔法学校では俺より強くなれないから外の世界で強い奴と戦いに行くらしい。俺も情報集めがしたかったからそこまで気にしない。ただ、俺も外でいろんな奴と勝負したら強くなれるんじゃないか。それを言った時のナギのあほ面は死ぬまで忘れられない。

side out

ナギがマジを超える日は来るのだろうか？

マギ十二歳、ナギ十歳、相も変わらずしまらない旅立ちであった。

旅は道連れ、俺は拉致られ!?(後書き)

ナギのアホっぽさは出せたでしょうか?

ナギの赤い悪魔化。彼にも遠坂家の呪いがかかっているのでしょうか。

それでは次回むつつりスケベ(青山詠春)と異常性欲者^{アルビレオ・イマ}がでます。

ノシイ)

旅にお金は必要です。（前書き）

今回はあのムツツリーニの登場です。

駄文ですが、お楽しみください。

旅にお金が必要です。

マギside

村を出た俺たちは父親の知り合いがいる麻帆良学園を目指して旅をはじめたんだ。麻帆良は前世の故郷日本にあるらしく、最初はね、俺は柄にもなくはしゃいでいたんだよ。そう、麻帆良についてから、うちのバカが一銭の金を持ってきてないという天然ボケをしるまでは。

「お前やっぱバカだろ。……いや知ってたさ、お前がどうしようもない鳥頭で知ってたよ。でも、金くらい出ていく前に用意しとけよバカナギがあー!!」

ヒュウ、ドツカーン!!!!

「うを、あぶね。しょうがねーだろ。忘れちゃったもんは。それより、急に魔法ぶちこんでくるな、バカアニキ!」

ゴロゴロ、ズツカン!!!!

「お前にだけには、お前だけには、バカと言われたくはないわあー!!!! はあはあ、馬鹿らしい、体力の無駄遣いだ。」

なんかいろいろ疲れたよ、お母様。このアホ（ナギ）の面倒を見るのは大変。とにかく今はどうやって路銀を稼ぐかだな。今ちょうど、麻帆良祭という行事中らしいから何らかの賞金大会か何かないかな。うん、なんかの広告か？何々、賞金百万円、まほら武闘会だって。ラッキー、いい物件を見つけた。さすが幸運EX。あれ？でも、なんで俺って騒動に巻き込まれやすいんだろう。また、あの

幼女の仕業じゃないだろうな。あやしい。

「ナギ、この大会に出るぞ。賞金出るし、もしかしたら強い奴と戦えるかもしれないぞ。」

「うお、さすが兄貴。早く申し込もうぜ。」

「うん、そうだな。受け付けは中央広場であるらしいし、締切が近いから急ぐぞ。」

「おう」

俺たちはすぐに受付をして、予選に出た。俺たち二人はAブロックラしい。

・・・はつきり言おう、弱かったと。まあ、一般人相手じゃこんなもんか。でも、Bブロックの日本刀持った剣士は強そうだった。今のナギ同等、近接戦闘じゃ俺も負けるかもしれないな。なかなか楽しんだ。

強い相手との戦いは心躍る。ふふ、明日の決勝トーナメントは楽しんだ。青山詠春、どんな闘いをするのかな。やっぱ観客の度肝を抜きたいね。さあ明日に向けて仕込んでおこうと。

次の日・・・

「さあーやってきました、まほら武闘会決勝トーナメント。古今東西あらゆる武道の達人が己の体で、技術で、そして心でぶつかり合うこの熱き闘いが今始まる。括目せよこれが武の極致である。」

うおー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ナレータの演説のおかげか、見に来た観客のテンションは一気に上昇している。ここ麻帆良はいろいろとぶっ飛んでいる。麻帆良にある丘の上には世界樹と呼ばれる木がある。その木、真の名を神木・蟠桃というらしく、世界でもトップクラスの魔力含有量らしい。また、霊地としての格は一級ぼい。そして何より、学園全体にかけられている認識阻害魔法。これのため予選でも魔力や気は無詠唱ではあるが使っている人を見ても何もおかしいとは思ってないらしい。

間違いなくここは魔法使いの天国だね、一般人からしてみればいい迷惑だろうけど。

さて、決闘への準備でもしますか。ナギと当たるのは決勝か。そこまで負けないと思うけど、油断はしちゃ駄目だな。

時が流れ準決勝・・・

「次は準決勝、ここまでその精錬された剣技を見せてくれた青山選手。対するはこの大会に神風のごとく現れたスプリングフィールド兄弟が兄マギ選手。ここまでの全で一撃で倒してきている両者。どんな闘いになるのか必見です。それでは、始めっ!」

俺は合図の後すぐ瞬動で相手の後ろに回り込み遅延呪文で魔法の射手17矢を撃ち込む。

しかし・・・

「神鳴流に飛び道具はきかん。はぁー、ざんがんけん斬岩剣」

ていつて放った魔法全てを撃ち落とされ、なんか地面にクレータ
ーができるほどの上段切りがきた。木刀でこの威力、真剣ならどの
くらいと少しビビった。

しかし、こちらもなめてもらって敵わない。それでも魔法世界の
異端児とまで言われている俺がただの魔法の射手など打つわけがな
い。

「青山詠春だっけ。すごい剣の使い手だね。君みたいな人を待てい
うのかな、とても楽しい闘いだっただよ。」

「確かに私は京都神鳴流青山詠春です。マジ殿も入りと出がほとん
どわからない瞬動いやもうそれは縮地ですね、その技術すばらしい
ものです。それよりだったよ、とはどういう意味なのです。私はま
だまだ闘えますよ。」

「ふむ、まだ気づかないの。ほら周りの観客も叫び始めたよ。」

「なにを、言って……はぁ!？」

詠春はいつの間にかパンツ一丁になっていた。俺は魔法の射手に衣服の繊維を溶かす魔法を組み込んでいたのだ。それが木刀で撃ち落としたあと発動。空气中に分散した魔力残根が服を溶かしたという絡繰りさ。まったくもって無駄遣いと言われるが、武装解除と違ってこちらのほうがロマンがあるだろ（キリッ）まあ、男に使うものではないが、、いや、もう男に使うのはこれっきりにしよう。気持ち悪い。

「はいポーズ。ほらほら、君の写真集を全国ネットに流してあげるから頑張つて。きつと露出狂のお友達ができるさ。」

パシャパシャ、パシャパシャ

「うおー！そんな友達いらないから！カメラで撮るのはやめてくれ。参った参ったからー！！」

「うーん……………いや！（キラリッ）」

「NO!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

この後、大会監督が止めるまで赤い悪魔のいじめもといカメラのフラッシュ攻撃は止まらなかった。

一人の変態ドSのせいで、将来勇猛な青年の一生のトラウマがで
き、観客が同情と憐みの言葉を送ったのは言うまでもない。

これが将来サムライマスターと呼ばれた英雄と紅蒼の魔王、戦場
カメラマン、敵に回したら必ず殺される（社会的な意味で）と呼ば
れた英雄との一方は決して思い出さたくない哀愁溢れる出会いであ
る。

続く……………

旅にお金は必要です。（後書き）

まず一言、どうしてこうなった（笑）いやあく最初はまともに闘わせるつもりだったのですが、最後はまるつきり主人公が変態化してしまいました。

私的にからかうのNO2に位置してますから彼。

詠春君が精神的苦痛で円形脱毛症にならないよう、ご冥福をお祈りいたします（笑）

次回の投稿は少し遅れるかもしれませんが、まあ、そこは学生の忙しさを考慮していただけると幸いです。

新しい仲間（前書き）

三日ぶりの更新です。なかなか大変でした。

ではお読みください。

新しい仲間

近衛近衛門 side

「あ、あにき、路銀を忘れたのは謝るからも、もう許してくれ！」

「何言ってるのナギ。俺はぜんぜえゝん怒ってないよ。」

「滅茶苦茶怒ってんじゃない！目がマジなんだよ！」

「あん？なんか文句あんの？幼少の頃の黒歴史を暴露されたいの？
うん？」

「なまいてすんませんでした！！だからあの事だけはあの事だけは！！」

闘技場の中心に手足を縛られている赤毛のアホっぽい少年ともう一人は同じく赤毛なのじゃがひどく冷酷な微笑みを浮かべながら魔力弾を当たるか当たらないぎりぎりに撃つ少年。これ何というんじやったかのお？ほう、そうじゃった、こういう場合こういうんじや。

「これ、なんてカオス？」

一週間前じゃったかのお、知り合いの魔法使いから息子二人がこちらに来るといふ連絡があったのじゃ。兄は魔法反射というアリアドネードの学者たちが挫折し不可能としたその理論をわずか六歳のころに確立したまさしく魔法の申し子。一方弟のほうは理論など全てぶっ飛ばして魔法を使うバグ、また調査によると精霊に愛されておるらしい。

タイプは違えど二人とも間違いなく天才。しかし、友人の話ではかなりの問題児らしい。儂は当初そこまで気にしておらんかったのじゃが、その意味がこの大会で良くわかった。特に兄のほうは敵に回したら絶対にいかんタイプじゃ。儂もよく妖怪とまちがえられるがマジ・スプリングフィールドは悪魔という言葉でさえ霞むチートD大魔王様じゃ。マジ儂ちびりそう。

「俺も家族の恥は言いたくないよ。だからばらしはしない。安心しろ。」

「本当か！？ありがと「ただし勝負はまだ終わってないからね」いやー！！！！！」

そろそろ止めたほうが良いじゃろうか？ じゃがさつき嬪殿を助けたときすぐくに生まれたのじゃが、どうすればいいんじゃろう。とほほ、腹が痛い…………

side out

マギside

ふうい仕事したよホント。久しぶりにストレス発さnげふんげふん強者との闘いができて気持ち良かったあゝ。

あの後、俺はナギをボコボコにした後棄権した。え、なんでかって優勝しようがしまいがどちらにしろお金は入ってくるからね。そこまで順位は気にしない。まあナギの奴は戦闘の疲れで保健室で休んでるけど。いやあ色々たまってたんだろね、半年分ぐらいの恨みを込めて魔力弾ぶちこんだし。

で、それよりも

「さつきから俺いや、俺とナギを観察してる奴そこに隠れてんだろ。出てこいよ。」

そうさっきから俺たちのことを見ている奴がいることはわかって
いた。まあ敵意がないからほっといたんだけど、さすがに観察される
のは気持ち悪い。

「おやおやバレテないと思っていたのですが、いつ頃から気づいて
いたのですか。」

そういいながら出てきたのは、ローブをかぶり胡散臭い笑みを浮か
べた男だった。

「うーん今日あの剣士と闘っているときかな。なんか観察するよう
な視線を感じてな、なんとなくね。で、一体何の用？」

そういいながら俺は戦闘態勢に入る。いくら悪意感じなくとも隠し
ているという場合もある。こちらの世界はかなりシビアな世界だ。
油断したら最後死があるだけだ。

「ええ、実は私をあなたたち三人の仲間に入れてほしいのです。」

「はあ？それより三人とはどういう意味だ？俺たちは二人で旅をし
てるんだが。」

マジで何言ってるんだこいつ状態である。

「ふふ、私のことは気づいたのにもう一人の方は気づかなかったようですね。ねえ、露出狂さん」

露出狂！？ま、まさか！？

「私は露出狂ではない！だいたい人のトラウマを思い出させるな！
！」

「青山詠春（露出狂）！なんでここに？」

「なにか私の名前に不愉快な補足がついているようなんだが。まあいい。私もお前たちの旅に連れていってくれないか？」

「マジで言ってるのか、お前のトラウマを作った原因だぞ俺。」

実はこいつマゾなのか。俺は男のマゾに興味なんぞないぞ。つーか変態じゃないか。

「いやなんでさりげなく俺から距離をとるんだ二人とも。まあいい、本題に入るぞ。確かにお前はトラウマの張本人だが感謝してる部分もある。私は青山家の中でも天才と呼ばれていて自分でも知らないうちに天狗になっていたようだ。しかし、世の中にはまだまだ強い奴がたくさんいることがわかった。私はまだまだ強くなりたい。そのために君たちについていきたい頼む！」

へえ、逆上するんじゃないくて、自分の欠点を素直に認め改善しようとするなんて人間できてんなあ。俺だったら何倍返しにしてやろうかと考えるのに（笑）

「うん、まあいいよ。いちようナギにも聞いてみないとわからんけどたぶん大丈夫だろ。俺のことはマギと呼んでくれ。」

「恩に着る、私のことは詠春と呼んでくれマギ。」

「で、お前は結局誰なの？」

なんだかんだ言いながら、このローブ男の素性は一切わかっていない。不気味すぎる。

「私はアルビレオ・イマ。アルと呼んでください。私は世の中の面白いものを探して旅をしています。今回はあなたたちと旅をすれば面白いことがあると思います話しかけてみました。」

素性はすごく怪しいけど、たぶん教えてくれないだろうな。まあとりあえず、

「いいよ、あんたもなかなか面白そうだ。よろしくアル。」

こうして、四人（一人爆睡中）はともに旅をする仲間となった。

「アニキ晩飯、腹減ったあゝ、むにゃむにゃ。」

「空気読めやこのバカナギ！」

ゴンッ！

「ぎゃあーーーーー！！！」

四人の出発はまだとおいのであった。

続く
.....

新しい仲間（後書き）

だんだん、主人公が壊れていってます。誰か止めて〜。まあ私が原因なのですが。

今回の話しはどうだったでしょうか。

なるべくほのぼの路線で行きたいと思います。

次回は魔法世界に入ります。

それではお楽しみに。

結成、紅き翼（前書き）

どうも、お久しぶりです。今回は魔法世界での話です。

結成、紅き翼

マジside

おっす！おら悟空じゃなくてマジだ。俺たち四人はイギリスにあるゲートを潜りいま魔法世界ムンドゥス・マジクスに来ている。空飛ぶUMAや亜人と呼ばれる猫耳少女など一部のマニアなら鼻血を出しながら喜ぶような光景である。

「おい、みんな。これからどうする？」

「そうですねえ。まずは学園長の紹介状をもって連合に行きましょう。」

「そうだな、俺たちはまず拠点さがしに入らないといけないから、近衛殿のご厚意にお甘えよう。」

「俺は闘えるなどでもいいぞ。」

アルと詠春は同じ意見らしいな。まあそこらへんが妥当だろう。あ、あとナギお前にはあまり期待してないから。

「じゃあ、このマクギル元老院議員って人のところに行きますか。」

アル交渉ごとは任せた。」

「ふう、あなたもできるでしょうに。」

「え、だるい」

「即答ですか。わかりました。では行きましょうか、（メセンブリーナ連合）へ」

そして俺たちは元老院へと足を運んだ。最初に受付をすまして客間へと通された。待つこと十分、ようやく現れたのは人のよさそうなオッサンだった。

「おお、待たせてすまん。俺はマクギル、元老院の議員じゃ。して、君たちが近衛門の紹介の物かの？」

「初めまして私はアルビレオ・イマと申します。」

「私は青山詠春です。」

「おれはマギ・スプリングフィールド」

「俺はナギ・スプリングフィールド。よろしくなマクギルのオツチヤン。」

「こらナギ議員に対して何という。」

「よいよい、そんなに形式ばった言葉は使わなくていい。」

なんともフレンドリーなオッサンだな。まあそのほうが楽だけど。

その後、アルの交渉の結果、俺たちは連合の志願兵として紛争地域や戦場に出ることになった。まあナギの奴が後先考えずOK言っちゃったからな。あいつ戦闘しか興味ないだろう。

近年、連合と南にある亜人の国ヘラス帝国との間で戦争が起き始めようとしているらしい。そのため戦力が是非にも欲しいらしい。まあ金が良かったし、当初の目的の強者との闘いができるからナギと詠春はいいだろう。

さて俺もそろそろ活動しますかね。

「なあ、俺たちのチーム名を考えないか？」

ナギが突然提案を出してきた。

「いいですねえ、私は昔戦隊モノに憧れてたんですよ。」

「お前はたぶん悪の幹部の参謀だろうな。」

「それならお前は魔王を倒した後、やっと勝ったと思ったらLV.999の超無敵大魔王様だろうな。」

「「うんうん」」

「馬鹿野郎！俺が大魔王ごとにおさまるか！！！！」

「「「突っ込むところこそ！？」」」

なんかアホみたいなことやってるけどこんなんで大丈夫か？

「で、なんかあるか詠春？」

「話が急に変わったな。そうだな和同一門」

「サムライですね、わかります。」

「私は幼女愛好会がいいです。」

「うん、とりあえず死ね。」

はあ、まともな案がねえ。

「ナギはなんかないのか？」

「紅き翼アララつてのはどうだ？」

「「「おおすごいい！」」」

ナギが自分で考えて発言するなんて、お兄ちゃんは感げ「なんか、雑誌に書いてあったんだ。」

「俺の感動かいせやー!!!」

「ぶっはー!!」

本日のナギの飛距離プライスレス。

これが伝説に残る「紅き翼」アラルプラの結成の瞬間とは誰も信じたくない事実である。

続く…

結成、紅き翼（後書き）

次回は人物紹介します。

よろしく。

主人公紹介（前書き）

少し改訂しました。

主人公紹介

主人公；マギ・スプリングフィールド

年齢；13歳（大戦期）ナギの一つ上。

性別；男性

ステータス

筋力…C+（A+）

耐久…B-（EX）

敏捷…A+（A+）

魔力…S+（S+）

気力…A-（A-）

幸運…EX（EX）

＊…○はノア的能力を使った場合。

始動キー

ネギス・ネガサス・ネー・ジーサス

葱への深い恐怖心から生まれた始動キー。まあまあカッコよくない？

能力

・魔眼（ライナ＝エリス）

『伝説の勇者の伝説』に出てくるあらゆる存在の構築式が見え、また視認したその存在を分解したり構築したりすることができる。原作では能力の代償に「自分の愛する人を犠牲にする」ことで発動す

るが主人公はその代わりに魔力消耗となっている。魔法使いとして主人公は本質の能力ではなく、魔法の術式の解説によく使っており戦闘ではあまりにも強力なため緊急時以外は使わない。

・ノアズメモリー

『D・Gray-man』のノア力。しかしこの能力を使ってしまうと快楽（万物の選択）のメモリーで攻撃事態が効かなくなるというムリゲーになってしまうので、これも緊急時以外は使わない。だが、色（あらゆるものに変化する）、蝕（相手の中に蟲を忍び込ませるなど）、智（相手の脳を自由にできるなど）といった能力は諜報活動の時よく使う。また、移動するのが面倒な時よく夢の能力を使っているとかなんとか。

・直感（EX）

これはもはや予知や予言レベル。だいたい十秒先の行動がわかる。また自分の危機などは寝ているときなどに夢で出てくる。しかし、なぜかギャグ補正やナギのアホな行動には機能せず若干能力をくれた神に対し腹を立てている。

・巻き込まれた体質（EX）

俗にいう、主人公補正。このため幸運や直感などが働かないときがある。ぶっちゃけ、神のミス。しっかりしろ幼女神。

武器

・魔法杖（世界樹産）

原作ナギが使ってる杖と兄弟杖。世界最高峰の魔法発動体。

・????

マギにとつての最強の切り札。でも形が嫌いで緊急時以外使わない。形は本編でわかります。

紹介

ナギの血を分けた一つ上の兄。弟の突然の行動にいつも悩まされていると思っているが、トラブルメーカーなのは主人公も大して変わらない。

前の世界で葱で転んで死んだという何とも悲しい人。なんかよくわからないところで、神様に出会い能力をもらい転生。原作は知らないらしい。

性格は割とドライで大人しいが一度Sの心に火がつくと、あの鬼畜幼女大好き神アルビレオ・イマまで引くぐらいのドS大魔王様。本人いわく世の中攻めてなんぼらしい。うん、意味がわからない。

魔法の訓練を始めたところからチート開始。現存する魔法は禁術以外ほとんどマスターし、アリアドネーの学者が不可能とした『魔法反射』を作り出した天才。現在新しい魔法と失われた魔法を研究している。ロストマジック

また、情報収集が趣味でよくノアの能力を使つての諜報活動をしており、黒いノートを持ってはあちこちの組織に入り込んでいる。本当お前はどこのスパイだ、と言いたい。蛇足ではあるがナギたち紅き翼のメンバーはその黒い本のことを「デス・ノート（社会的意味で）」と原作のファンに怒られそうな名前で呼んでおり、それが世間に出ないことを祈っているらしい。

戦闘スタイルは基本後衛。しかし前衛ができないわけではなく前世の記憶にある合気道を主体とした柔の格闘術。また魔力によるブーストにより身体能力を2ランクあげることができ、近接専用の新魔法『メシアの祈り』は魔力の半分を代償に5ランクあげることがで

きる。ただし、30分だけ。

主人公紹介（後書き）

次回、ヒロイン登場！？
どうぞ期待！！

謎の鉄仮面美女!?(前書き)

なかなか難産でした。

謎の鉄仮面美女!?

マギ side

連合で仕事を始めてから早一年、俺たちもだいぶこちらの生活に慣れてきた。途中辺境の森に任務で赴いたときフィリウス・ゼクトというみため白髪のリョタに会いナギとの戦闘になった。結果ナギがけちよんけちよんにやられた。で、ナギがゼクトに弟子にしてくれると嘆願、最初のうちは断っていたが、毎日に訪れるナギに根負けし魔法を指導してくれることになり、紅き翼の一員となった。ゼクトは見た目あんなんだが、実際は不老で俺たちの中で一番の年長者。魔法の技術も俺より上だった。いやあ、天才なんて言われていたから天狗になっていたのかな。

さすがに悔しかったので俺も弟子入り。この修行で俺は真のチートに目覚めたよ。ゼクトは長い間生きてるだけあり、古代呪文など現代では使い手が少ない魔法など見せてくれた。そのおかげでいままで滞っていた新魔法が次々完成した。完成した魔法をゼクトに見せに行ったりしたときなぜか遠い目をしながら、こやつもバグか、と呆れた声が聞こえたのは気のせいだと思う。で、一か月でゼクトおじいちゃんの魔法免許皆伝をもらった。ゼクトお爺ちゃんありがとうと言った瞬間、萌える違った『燃える天空』が撃ち込まれた。以外に歳を気にしていたらしい。

ナギはいまだアンチョコ見ながらだが、魔力運用及び術式の理論的展開ができるようになりかなりレベルアップした。ぶっちゃけた話、

基礎もできていなかったナギの成長率はすさまじく、本来の膨大な魔力と精霊の加護を受けているナギは魔法世界の中でも上位に上がってきている。これでもう少し頭良くなるといいんだけど。いっそのことアリアドネーにぶち込むか？

詠春は自分の剣を見つめなおし、一族の一つの極致、反転をものにしてようと修業を重ねた。反転しているときはバーサーカーみたく理性が吹き飛ばらしくそれを制御失敗するたびに俺の新魔法の実験台になっている。修業をはじめて半年何か少しかんだらしくニヤニヤしていたのでムカついて詠春恥ずかし写真を俺たち紅き翼のホームページ（俺が作りました）に載せた。その後、俺のパソコンが真っ二つになった。あれ、二十万したのにO R T

アルは俺と一緒に情報収集したり、ナギの魔法修業を手伝ったり、ゼクトと魔法談義したり、詠春をからかったりしている。あれこいつ仕事してねえ。この前も幼女ナンパしてたし。明日あいつの寝室に熟女の写真で囲ってお婆ちゃんボイスの目覚まし時計仕掛けよ。次の日アルは飯を食べなかった。すまんアル、やり過ぎた。

で、俺はというと魔法の修業が一段落ついたので、今度は気のほうを重点的に鍛えることにした。気とは生命エネルギーと深く関わっているものなので修業メニューは体を鍛えることから始まった。転生してから魔法に頼りっぱなしの俺は魔力ブーストがなければ身体能力は一般人とあまり変わらない。そのため修業当初は筋トレを中心とした。ここでつける筋肉はボディビルダーごとくムキムキではなく戦闘に応じた体作りをしないといけない。

筋肉には先に述べたボディービルダーのように見えるアウターマッスルと表面ではなく中にあり見えないインナーマッスルとがある。このインナーマッスル、普段余り使わない部位のため鍛えるのがすごくきつく、筋肉がとても熱を持ち始め熱くなる。本当に地獄だったが半年鍛えることによって柔軟性のある細マッチョとなった。前世では運動嫌いの自分だったが、この修行を通して体を動かすのが好きになった。

話しが脱線したため戻すが、残りの半年は詠春との組手と、漫画をもととした気を用いた術の開発に勤しんだ。この術の開発で『NARUTO』でお馴染みの影分身の術を完成させた。これにより原作の主人公ごとく膨大に分かれたりはしないが一人が魔法、一人が気、一人が諜報と活動幅が増えた。ちなみにナギにこれを教えたところ一発で成功。なんとなくて出来てしまったという弟に軽く殺意が芽生えた。かなり落ち込んでいる俺に詠春がお前もあまり変わらないと言われさらに落ち込んだのは秘密である。

と、まあ途中何ともふざけたこともあったが割と充実した一年だった。後、赤き翼の目的が変わったこともこの一年の中でのことだ。最初の頃はリーダーであるナギの力試しが目的だったが、任務中ナギと仲良くなった一人の少女が流れ弾に当たり治癒魔法が碌に使えないナギでは手当が遅れ亡くなってしまおうという戦争ではありきたりな悲劇があった。ナギはそこで初めて自身の持つ魔法という武器の恐ろしさに気付く。茫然と少女を抱きしめるナギを見て俺自身も深く考えさせられた。自分がよく考えずに撃っていた魔法でどれだけの人が亡くなったのかと考えたとき激しい自責の念に押しつぶされそうになった。

それからナギと俺は今まで力を入れてこなかった治癒魔法をゼクトから学んだ。そして方針である、戦闘ではなくこの戦争をいち早く終わらせるために戦うと決めた。矛盾を孕んではいるがすでに俺たちは立ち止まることができない。まあ、まともな死にかたはせんだろう。

戦争を終わらせるためマクギルなどに働きかけているのだが状況はお世辞にも芳しくない。しかも諜報活動が続いているうちにこの戦争自体がきな臭くなってきた。俺の直感がこの戦争は何か裏があると見た。

そんな訳で、俺はまだ調査していないウェスペルタイア王国の首都オスティアに来ていたのだが、途中フード着た人物が所謂DQNに絡まれていた。無視しても良かったんだが、後味が悪い。そう思っ
て声を掛けたのが全て神によって仕組まれた運命だったのかもしれない。これは俺にとっては最悪で、後から最高と変わる出会いだった。

side out

??? side

妾はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア、この国の姫じゃ。最近、国境付近で帝国の部隊が駐屯しているらしく、国の中はとても

緊張している、そう聞いた妾は視察のため町を歩いていたのが失敗じゃった。

「おい、お前！俺の肩にぶつかっておいで謝罪の一つもないのかよ。」

町を歩いている最中、モヒカン頭に呼び止められた。周りにも生理的に受け付けられないような取り巻きたちがいる。肩にぶつかった感触はなかったがここは穏便に済まそう。

「ふむ、すまかった。これで良いじゃろう？」

「てめえ、なめてんのか！ぶち殺すぞ！！」

「誰が貴様などをなめるか！気持ち悪いはこの下郎が！」

何を言うかと思えば言うに事欠いてなめろとな、ふざけておる。

「そういう意味じゃねえよ！てか、お前たちもなに一步下がってんの？」

「いや兄貴にそんな性癖があるなんて……いや人の趣味はそれぞれぞ

れですよ。気を落とさないでください。」

「いやそういう性癖とか無いからね！頼むからそんな可哀想な子を見るよな目つきで見ないで！！」

なにやらこやつ変態らしいな（勘違いです）。揉めている間に逃げよう。

「だから、だから違うって…うん？てめえなに逃げようとしてんだよ。てめえのせいだろうがこの状況は！」

奴はそういつて拳を握り殴りかかってきた。小さい頃から護身術を習ってはいたが突然のことで身動きが止まってしまった。殴られる。

そう思い目をつむり衝撃を待つがなかなかこん。さすがにおかしいと思い恐る恐る目を開けると………赤毛の少年がモヒカン頭の拳をつかんでいた。

「て、てめえなにmond！？手を放しやがれ。」

「いやあゝ手放すとまた殴りかかってくるでしょうに。しかも君変態らしいじゃない。お袋さん泣いてるよ？」

「だからだから、俺は変態じゃないんだ。信じてくれよ。」

「犯人はみんなそう言うんだ。さっさと吐いて楽になっちまえよ。」

アルビレオ・イマ

「……………もういい。お前らやっちまうぞ。」

「「「おうっ！」」」

少年とモヒカンのよくわからない言葉の応酬は少年に軍配が挙がったが今度は暴力により訴えるようじゃ。いかんこのままでは罪の無いこの少年が変態の餌食になってしまう。

「お、おぬし早く逃げるの」「これだからDQNは。口で勝てんとすぐに手が出る。カルシウムが足らんぞ。小魚食べろ、小魚。」じゃ。はあ!？」

一瞬じゃった。妾の見えぬスピードでモヒカンたちを気絶させた。こやつ見た目に似合わずなかなかの強者らしい。

「よう、大丈夫か嬢ちゃん。」

そんなことを考えている間に先ほどの少年が転んだ妾に手を差し伸べてきた。というより妾は嬢ちゃんじゃないわ。そう文句を言ってやろうと立ち上がろうと力を入れたら、

「こ、腰が抜けてしまったらしいのじゃ。」

何たる不覚。王族としてあまりにも情けない。少年も爆笑しとるでない。

「ぶっ、はははすまんすまん。ほれ、家まで負ぶってやるよ。」

「なっ／＼／＼そんなことせんで良い。」

「じゃあどうやって帰るんだ？」

ぐぬぬ、ここは少年の好意に甘えるしかないか。

「へ、変な所を触るでないぞ。」

「おいおい、自意識過剰の女は持てんぞ。」

妾は即座に王家の魔力を纏った拳を無礼者に振り上げる。

「うげっ！」

少年が数メートル飛んだ。爺仕込みの王家パンチに死角なし。

「てめえ、なにしやがる！てかなんで俺の魔法障壁をすり抜けた！」

「乙女の怒りじゃ！」

「どこの世界に男をぶっ飛ばす乙女がいるんだよこの暴力鉄仮面！」

「どこに男なんかがおる。妾の前にいるのは塵屑に等しい有機物じゃ」

「この枝分かれ眉、助けてやったことの恩を仇にしやがって、ておーいなにそんなに殺気出されてるのおー。」

こやつは言うてはならぬことを言いおった。

「だ・・、え・わ・・ま・じゃ」

「はい？聞こえませんか？大きな声ではきはきと言いましょって学校で習いませんでしたか」

「だが、だれが枝分かれ眉じゃ！！！！」

「ふべら！」

注意・女性の身体的特徴をネタにすると主人公のごとく星になってしまうので、世の男性方は気を付けましょう。

side out

マギside

現在俺はオスティアの町を回っている。事の発端は俺の余計一言が原因だ。反省もしてるし後悔もしてる。ただ、今の状況は納得できない。

「ほれ、さっさと歩かんか。」

「お前俺におんぶされている身分のくせして態度デカすぎるだろ。」

そうこの厚かましい金髪美少女をおぶりながらの行動だ。重くはないが動きづらい。

「身分差別は好きではない。」

「じゃあ少しは俺を労われこの能面鉄板少女。はあまあいい。そういや名前聞いてなかったな。俺はマギ・スプリングフィールド、あんたは？」

「妾はアリカじゃ。都合あって下の名前は教えられん。………ちょっと待て、お主の名前はマギ・スプリングフィールドといったな？」

「ああ、そうだけど。」

「それじゃ、お主が紅き翼の『紅蒼の魔王』か？」

「まあな、俺その呼び方嫌いなんだけだな。」

うんホント嫌い。どこの厨二病だよ。まだ、戦場カメラマンがいい。

「じゃが、なぜ蒼なんじゃ？紅は髪の色とわかるのじゃが。」

「ああ、蒼も髪の色からきてるのさ。」

「お主ついにボケたのか。どこからどう見ても赤髪じゃろう。」

これ良く言われるんだよね。お前どこから見ても赤いじゃんて。前に俺は魔力超過現象という病気を患っていてマジックアイテムで自分の魔力量を抑えているといったのを覚えているかな。あれはいわばリミッターみたいなもので、つけている間はいろいろと制御されているわけ。だから本気を出すときや緊急時の時には『ハーメルス（神を縛る紐）』という髪留めを外すわけ。そうするとなぜか知らないが髪の色が青くなるのよね。この病気の人はみんな青い髪の色をしているらしいけど。まあそんなリミッターを外しているときの俺は絶賛無双状態。そのイメージが帝国にあるらしく、めでたく厨二な二つ名がついたわけ。

「なるほど、そういうことじゃったか。まあよい、さっさと行くぞ。」

「へいへいお姫様。」

この皮肉が実はすごく的をいた発言だったことに気付くのはまだ先のことである。

『緊急避難警報！緊急避難警報！オスティアに住む一般市民に告ぐ。現在帝国の大部隊が国境を越え我が国に宣戦布告。至急避難するよう。』

なんだ急に。帝国がこの国を落として何のメリットがある。

「おい、アリカ嬢。あんたをすぐに避難場所に転移させるからよろしく。」

「ま、待て妾はここに「悪いがここの防衛に行かないといけないかな、縁があったらまた会おう。」人の話を聞け…」

とにかく転移をすませたからあのおっかな美女は大丈夫だろう。なんか言いかけてたけどなんだったんだろう。いや、今はナギたちに現状を伝えここの防衛線を手伝ってもらわないと。

『おい、アニキ聞こえるか。今俺たちはオスティアに任務で来てる

んだがアニキも早く来て手伝ってくれ。』

ナイスだ、ナギ。お前の行動力には感心する。

「それなら大丈夫だ。俺もこちらに来ている。お前は今どこにいるんだ。」

『おお、さすがだなアニキ。俺たちは今城の離宮に来てんだ。帝国が鬼神兵を出してくるから俺たちでもきつくて。』

確かにあの図体でかい奴は厄介だな。

「わかったすぐ向かう。やられるなよ。」

『へへ、誰に言ってんだアニキ。俺は最強の魔法使い「千の呪文の男」ナギ・スプリングフィールド様だぜ。アニキが来る前に終わっちまってるぜ。』

「まじ、じゃあ俺いかね。」

『冗談だからね、冗談。早く来て下さいお兄様。』

ナギよ。お兄様気持ち悪いからやめてくれ。それは妹キャラじゃないと駄目だ。

s
i
d
e

o
u
t

謎の鉄仮面美女!?(後書き)

ギャグ路線のはずが前半はかなり暗い感じでした。

戦時中は少し真面目かな。

やはり微妙。

アリカ姫初登場。うまくかけていたでしょうか。

次回はオスティア防衛戦。

よろしく。

幼女を守れ！（アル活躍編）（前書き）

最初に題名はアルの部分は嘘です。

かなりの難産。

駄文ですがお読みください。

幼女を守れ！（アル活躍編）

side マギ

『総員退避！王宮に逃げろ！！』

戦場の中で連合側の司令官と思わしき人物が撤退命令を下している。状況はこちらがかなり悪い。オスティアに駐在する軍自体が少なく国軍だけでは帝国との戦力差は歴然とある。そのため最後の砦である王宮の傍にて交戦をするのだろう。

「胸糞が悪い。オスティアの上層部は人の心があんのか。」

そう最後の砦である、黄昏の姫巫女アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシの下へと。

『き、鬼神兵だー！帝国が攻めてきたぞお！！』

クソ、急がなければいけねえ。鬼神兵となると並みの魔法使いでは歯が立たないだよなあ。てかあれ卑怯だろ。あれだよ、仮面ライダーが敵を倒すときウルトラマン連れてきたって感じだよ。え、意味が分からない。そこはあれだ、感じる、空気読め。バカなこと言っていないで早く行かないといけないな。

そう思い杖に乗って離宮へと飛ばしていく。途中でナギたちと合流。ナギは子供を戦争の道具にしてることになり腹を立てている。まあそうだよな。

ちなみにアルは

「戦争ですからねえ。見た目通りの年齢かすらわかりません。ですが幼女は愛でるもの。強制するものじゃないんです。」

と豪語されていた。前半は少しはまともかとおもったが後半がすべてを台無しにしている。なんか病状が悪化していないか。

「いや、もう手遅れです。」

と、何か受け取ってはいけない電波を受け取ってしまった。俺、この戦争終わったら病院行こうかな、と死亡フラグなのかどうかかわからないフラグを立てたのは俺しか知らない。

『精霊砲全弾消失!』

『消失だ?!? 王都の魔法障壁では無いのか!? まさか……!』

『広域魔力減衰現象を確認……減衰速度加速中、間違いありません。
“黄昏の姫御子”です!!』

やはり、この国の上は腐っているな。

「おい、みんな急ぐぞ!」

「そうですね、幼女のもとへと急ぎましょう。」

「はあ、二人とも先に行くな。」

「詠春あきらめろ。バカとロリコンは止まらない。」

俺は学習したんだ。詠春、お前も早く慣れろ。そうしなければ、予定通り禿るぞ。

「俺は禿ん!!!」

そんな、緊張感のない中俺たちは姫巫女のところへと行くのだった。

side out

side???

…私は何もない。…何も感じないし、すべてがどうでもいい。薄暗いこの空間で毎日を過ごしている。ここに来るのは食事などの面倒を見てくれるメイドと私に何かの薬を飲ませる気持ち悪い人間だけ。

「おい、早くこい!!」

今日もまた痛いことがあるのだろうか。いつも鎖で私を縛る。でも、それすらどうでもいい。私は一人、いつも一人なのだ。

パリン!!!

私の能力で魔法が消える。私の能力は希少らしい。望んでない、そんなもの望んでない。

「そんなガキまで担ぎ出すこたあねえ。後は俺に任せときな」

「お、お前は、紅き翼……千の呪文の……」

アラ・ルブラ

「そう、ナギ・スプリングフィールド！　またの名をサウザンドマスター！！」

「自分で言ったよコイツ」

「ナギ、嘘はいけないと思うぞ嘘は。」

「うるせえよ詠春、アニキ。さっさと倒しちまうぞ。さあて、行くぜ。百重千重と重なりて走れよ稲妻　『千の雷』！！！！」

「へいへい、高速詠唱『ネギス・ネガサス・ネー・ジーサス、火の大精霊、水の大精霊、風の大精霊、地の大精霊、四大揃いて破滅へ導け、四大元素合成、根源消滅魔法へエーテリオン』」

「お前たちは…はあゝしょうがない、神鳴流奥義真・雷光剣^{しん・らいこうけん}」

「ふふ、私も頑張りましたよ、重力魔法」

私の前に突然現れた四人が敵を倒していく。

「ふう、すっきりしたな。」

「あらかたの敵は倒したでしょう。」

「お前たちは少しは加減しろ。」

「そうだそうだ。」

「お前あなた（アニキ）がいうな（言わないでください）（言ってんじやねえよ）！！！！」

「なにこれ、ひどい！」

私もそう思う。

「さて、安心しな。俺達が全部終わらせてやるからよ」

未だ私の傍にいる男に、そう告げる。

「な、しかし。敵の数を見たのか！？ お前たちに何が……」

「俺を誰だと思ってやがる、ジジイ」

「俺は、最強の魔法使いだ！……魔法学校だけは中退だな」

最後にぼそつと何かとんでもないことを言ったように思ったのは
気のせいだろうか。

「フフ……どれだけあなた個人の力が強かろうと。一人では世界を
変える事など到底……」

「あーあー、るせーよアル。俺は俺のやりたいようにやるだけだ。」

「ナギ、私はあなたをそんな我が儘に育てた覚えはありません！」

「俺はアニキに育てられた覚えがありません！」

赤毛の二人が何か言っている。あっさつき一番とんでもない魔法を
ぶっ飛ばした男と目があった。

その男は私を縛る鎖を壊してくれた。

「よう、嬢ちゃん。俺はマギ。嬢ちゃんの名前は？」

「名前……？ アスナ、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エントオフォシア」

「うーん、長いな。呼ぶときはアスナでいいか。」

そう言いながら赤毛の男マギは私の髪を撫でてくれる。とても温かい。

なんだろう、胸になかった、いやなくなった温もりが戻ってくる。

私がこれが心であると気づくのはまだ先のことであった。

s i d e o u t

一人の少女の救出の一步目が始まる。彼女がこの世界のキーパーソンであることをまだ彼らは知らない。

物語は更なる加速を見せる。

続く…

幼女を守れ！（アル活躍編）（後書き）

最近少しシリアス。誰かシリアスブレイカーが欲しい。

やっとな魔法出せました。少し『FAIRY TAIL』からヒントをもらいました。

次回はみんな大好き？バグバカの登場です。お楽しみに。

バグ対バグ。最後に裏ボス!?(前書き)

今回主人公はあることに気付きます。

バグ対バグ。最後に裏ボス!?

side マギ

先の一戦から数か月たつ。あの後暴れすぎとメガロの連中がぁーだこーだ言っていたが、戦場にも顔を見せない奴らの言ってることなど無視していた。そのためか、最近の任務では地方に飛ばされている。大方手柄をすべて自分のものにしたバカが最近戦果をあげる俺たちを疎ましく思っているだけだろう。まあそのおかげで暇ができ、いろいろと調べることができたんだが。

と、なんともお偉いさん方の事情であちこちに飛ばされている我ら紅き翼はというと…

「んっふふっこいつが旧世界は、日本の鍋料理ってやつかあ」

現在、鍋パーティ中!

「じゃ、早速肉を」

「あつ、ナギ、おまっ・・・何、肉を先に入れてるんだよ」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

「いいじゃねえか、旨いもんから先でよ、ホラホラ」

頼むナギ、ゼクトお前らは鍋に触るな。

「バツ、バカ。火の通る時間差というものがあつてだな。まずは野菜を入れて・・・あーちょッ」

「あーうつせ、うつせーぞえーしゅん」

「あつ、しらたきのそばに肉を入れるんじゃない。肉が硬くなる」

「フフ・・・詠春。知っていますよ。日本では貴方のような者を、鍋將軍というそうですね。」

ドカッン！

なんか効果音ついてるんだけど懲りすぎだろ（呆）。しかし、ナイスだぜアル。君のおかげで故郷の味は守られた。

あとアル、鍋將軍じゃなくて鍋奉行な。そういうお茶目な所嫌いじゃないぜ。すまん気持ち悪かったな。

「くっ、詠春負けたぜ。」

「詠春、全て任す。好きにするが良い」

「あ、ああー・・・」

「詠春、前にも言ったがあきらめろ。」

こいつらが人の言うこと聞くわけがない。

「いつも慰めてくる奴が一番とんでもないことしでかすから、素直に落ち着けん。」

「「「そうだな。（そうじゃな）（そうですね）」」」

お前ら最近厳しすぎるぞ。俺のライフもうゼロよ！

「おお、これは醤油か。相変わらずうまいのう」

「ホントだ。うめえっ!？」

「これこそが日本の誇る醤油だよ」

懐かしい味だ。お袋さん! って前世のババアは死因の原因。葱で崇ってもいいかな。

「それに大根おろしですね」

「これがしょうゆか、スゲェうめえっ」

「ナギ、お前は日本に来たとき寿司食ったろ」

「詠春、ナギは三日前のことさえ忘れてしまうスーパー鳥頭なんだから。一年前のことなんかきれいきっぱり忘れてるだろう。」

「なんだ、俺スーパーなのか。やったぜ。」

ごめんナギ、お前はウルトラだ。

「でも、姫子ちゃんにもくわしてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃ・・・？ああ、オスティアの姫御子のことじゃな？」

「そうだな、あんな子はまで使うとは世も末だよな。」

「まあ・・・戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるやも・・・です」

さあどうだろうな。あれだけの能力、権力者がほっとく訳がない。

「その戦だが、やはりどうにも不自然に思えてならん」

「それなんだが、どうやら裏である組織が動いているらしい。」

「ある組織とは？」

「ああ、実態はまだつかめてないが組織名はわかった。『完全なる世界』奴らが何らかのアクションを起こしているとみて間違いないと思う。」

「完全なる世界ですか。ずいぶん高尚な組織名ですね。」

「じゃあ、そいつらをぶっ飛ばせばこの戦争も終わるのか！」

「そう簡単にはいかんじやろう、ナギ。」

「だろうな。もともとの原因が人間と亜人の不和からくるもの。根本的な部分が解決していない。」

「ですが、何も道しるべがなかった当初より動きやすくなりますね。あなたの諜報活動のおかげです、マギ。」

まあ、情報は戦場において命に等しい。偽の情報で部隊一つが壊滅などよくある話だ。

「何が？」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろうが、鳥頭。それと肉ばかり喰うな」

「詠春、ナギはバカだから自分で言ったことも覚えてないだけだ。」

それとナギは野菜だけ喰ってろ」

本当、人の話は聞け。そんなんじゃ社会じゃ生きていけんぞ。まあこいつの場合全て感で生きてるからな。お前は野生動物か。

うん？これは何かくる！！（久しぶりの直感スキル）

あ！鍋が、愛しき故郷の味が！！

「食事中失礼〜ッ。俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ」

殺す、俺のすべてをもつて殺す。

「何じゃ？あのバカは？」

「帝国のって訳じゃなさそーだな。えいしゅ・お、お！？」

「フ・フフフフ・食べ物を粗末にするやつは・・・」

「どーしたー来ねーのかぁー。来ねーならこっちから・・・いッ」

「おほ」

「斬る」

おほって男の出す声じゃない。間違いない奴は露出ホモ野郎だ。

「お？ 詠春の攻撃凄いでるぜ」

「あの大男やりますよ。見たことがあります。ちょっと前、南で話題になった剣闘士ですよ」

「詠春、やるんだ。露出狂としてはお前のほうが勝ってるぞ！」

「ちよっタンマタンマ。あんたマジでつええな。ちよい待たね？」

「ふざけるなっ。やる気なら本気を出せ貴様ッ！それとマジ私はお前のせいであんなことになったんだ！！」

「へっそースカ。それよりお前変態なんだな。新たな情報だぜ。」

へ、奴さんも情報の大切さがわかってるらしいな。

「情報その1. 生真面目剣士はお色気に弱い。＋露出狂」

「くっ・・・卑劣な。後貴様に露出狂などと言われたくない！いや、何のこれしき。心頭滅却すれば火もまた――」

詠春はカプセルから出てきた女性に囲まれ目を閉じた。アホだろあいつ。それよりアル、幼女の精霊をみてハアハアするな。

「フ。ホイ一丁あがり。ぬんっ」

ん？今のは『雷の暴風』ヨウイス・テンベスター・フルグリエンスか。てか、ナギ、詠春も一緒にぶっ飛んでんだけど。哀れ詠春、遺体は後で回収してやる。

「おう、出たな・・・情報の4。赤毛の魔法使いは弱点なし。特徴、無敵」

「いや、その子魔法覚えられないで弱点あるよ。」

「てめえら、手エ出すなよ。それよりアニキ、相手に恥ずかしいこ

と言わないでくれ!」

ナギ、君に恥ずかしいという感情があったことが驚きだよ。

「言われずとも」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ。」

「奇遇だな小僧。俺も南じゃ無敵と滅法噂の男だ。」

いやだから俺が弱点リークしたよね。無視なんですか、そうなんですか。

「へっ、おっさんいいのかよ? 剣なしで。」

「心配すんな。俺は素手のが強え。」

「アル、少し俺はここから離れるわ。」

「おや、どこに行くんですか。」

「いや、あの筋肉ダルマに誰を敵に回したか思い知らせるためにな。ケツケツケツ。」

「そ、そうですか。お、お気を付けて。」

食べ物の恨みは恐ろしいのだ。貴様を必ず絶望へと誘ってやる。

んで13時間後。環境破壊、その言葉に尽きるほど、荒野は荒れている。帰ってきたらものがすべて壊れていました。本当に少し自重しろ、このバクども。

「フ・・・フフ・・・やるじゃねえか小僧」

「あんたこそな」

「いや、5対1で挑んでおいてこの様じゃあ・・・俺の完敗か」

「俺は・・・俺に並ぶ人間が3人もいたってことで満足だぜ。いやアニキは俺以上につえーか。」

「なんだ、お前より強い奴がいるのか。やべえ、闘いてえ！」

「なんだ、そんなに闘いたいのか。しょうがない闘ってやろう。」

相手からのご所望だ。俺はノートを開き話し始める。

「やばい、おいお前早く負けを認めろ。」

「なに言ってるんだ。まだ闘ってもいないのに。」

「あれはあれは、触れてはいけない、パンドラの箱なんだ！」

ふふ、もうすでに遅い。

「ジャック・ラカン、これは何かわかるかな？」

「なんで俺の名前を………て！それは！！」

「ああ、愛しのアミー」「やめてくれ！俺が悪かった。だから後生だやめてくれ。」ん？なんで、謝ってるの？勝負だよ勝負。」

なんかナギたちもこのノート見たらビビってんだけど。アルさんあんたいつもの胡散臭い笑みはどこに行った。詠春、気絶のふりやめようか。ゼクト、何こんな時だけ爺ちゃんぽく茶飲んでんの、現実逃避やめて。最後にナギ、なにそんなにごめんなさい、ごめんなさいって謝ってんの。

「こんな勝負ねえよ！ま、待てよおいあんたの名前はマギ・スプリングフィールドなのか？」

「まあおれがマギだけど。」

「情報その5マギ・スプリングフィールド。敵に回しては駄目。機嫌を損ねても駄目。まず前提に関わっては駄目。……ふっ情報通りだぜ。」

バチバチバチバチバチバチ！！！！！！

俺は素早く雷の暴風を三発撃ち込む。

「俺はどここの裏ボスだあー！！！！」

「ゲボラッパ！！！！」

さらに荒野が荒れたには言うまでもない。

その後何度か俺たちにちよっかい出してはナギと戦闘、疲弊してるところに俺の口撃（ムカついたときは手が出ます。）がサイクル化して、いつの間にか仲間になっていた。なんで、仲間になったのか聞いてみたら、俺をを敵に回す位なら龍樹（魔法世界生物の最高レベル）と闘うほうがましらしい。

俺が何したよ。

バグにさえ恐れられる俺ってどうなんだろう。

自分の規格外差に初めて気づいた瞬間だった。

s i d e o u t

後日、何か哀愁漂うマギを見かけた人がいるとかいないとか。頑張れマギ、負けるなマギ。

続く…

バグ対バグ。最後に裏ボス！？（後書き）

やっと、自分の規格外に気づきました。環境が環境なため自分がまともと思っていた彼ですが、今回のことで認識が変わりました。

ですがそれでも自重しない。そんな感じで頑張っていきます。

次回奪還と協力者との会合まで行きたいと思います。

あの俺逃げていいですか？（前書き）

今回はイベントが一気に来ます。

あの俺逃げていいですか？

side マギ

どうも前回自分がバグを超す存在だということを知ったマギです。ぶっちゃけ薄々気づいてはいました。でも面と向かってあれだけストレートに言われたのは初めてだったので少し落ち込みました、が一時間くらいで立ち直りました。ええもういいです。こうなったら自重しません（キリッ）そういう面持ちで迎えたグレートブリッジ奪還戦。先に謝っておきます。すいません、やりすぎました。

今まで散々に自分たちをコケにしてきた元老院は帝国に連敗続き。ついには攻防の要であるグレートブリッジを奪われる始末。これはいけないと思い実質最高戦力である紅き翼を投入を決意。これらの情報を見た俺はマジ激怒。ここ最近溜まっていたストレスの発散＋自重を無くした大規模魔法。結果……グレートブリッジ消滅作戦になってしまいました。テッヘ。いやテッヘじゃねえよというあなた、私が一番びっくりしてあんなになるなんて状態です。今までバグども相手に調節していた新魔法はアリアドネーに第一級禁術魔法となっていました。

どんな魔法かと言いますと、前に詠春に対して使ったヌギヌギ属性のついた魔法の射手があったじゃないですか。あれは繊維質を溶かす魔法でしたが今回ののは繊維質だけではなく生物以外すべてを溶かす術式を雨を降らせる術式と混合してぶち込んだわけです。するとまあどうでしょう、あれだけ大きな壁は溶けていき兵士たちの武器

や防具まで溶けていくではありませんか（劇的ビフォーアフター系）。

今回の作戦で死傷者ゼロ、裸を見られた女性被害者多数、鼻血を出して失神した男性多数、男の裸を見て新たな扉を開いた男性少数、漏出癖が発生した数プライスレス（笑）。注意事項今回の作戦を混乱に落とした俺は詠春に殺されかけた。何でもお前はまだ懲りてなかったのかということらしい。ごめんよ詠春、何度も言うけどこれは男のロマンなんだ。結局その日は一日中刀を持ったバーサーカーに追いかけられたのは戦場以上に気が張ったといっておこう。詠春だって裸見てたくせに、このむつつりスケベが。

そんなこんなで戦時中なのにゆったりしてる俺達には新たな仲間ができた。連合の捜査官ガトウ・カグラ・バンテンバーグ、その付き人のタカミチ・T・高畑、クルト・ゲーデル、そしてオスティアの貴族サーシャ・フォン・バリエッタこの四人だ。

ガトウはこの戦争に裏があるとみて捜査していくなかで完全なる世界の存在に気づき俺たちに協力を仰いできた。俺が調べていた情報を渡すと、バグもここまで来ると気持ちいいなと遠い目をしていた。タカミチがすごく心配していたが俺は何もやっていない。

タカミチとクルトは戦争孤児でガトウが面倒を見ていたらしい。タカミチは素直な子、クルトは小生意気なガキってところかな。タカミチは生まれつき詠唱魔法ができないらしい。俺が魔眼で見た結果、精霊たちがタカミチの存在に気付いてないということが分かった。

つまり影が薄いのである。これはさすがに本人には言えない。で、詠唱できない代わりに本来反発しあう魔力と気の合成『咸卦法』をガトウから学んでいる。クルトはどうやら詠春の剣術がお好みらしく詠春にかなり頼み込んでいる。案外あの二人は相性いいかもよ。

サーシャの実家バリエッタ家は王族の分家でウェスペルタティア王国の有力貴族らしい。彼女は今回の戦争で自国のやり方が気に入らず家出したらしい。そんな中戦火に巻き込まれ死にかけてるところに我らがリーダーナギ参上。それでナギに一目ぼれした彼女は俺たちの仲間になった。彼女は貴族の娘がなかなかしつかりした女性で毎度毎度どこか抜けてる我が愚弟の世話を焼いてくれてる。はたから見るといちゃいちゃして見えるのは俺だけだろうか。ちなみにナギ君はサーシャの気持ちにまったく気づいてません。このリア充が！注意…あなたも将来そうなります。

「で、タカミチは何してんの？」

「あつ、こんにちはマジさん。今ですな咸卦法の修業をしてるんです。でもなかなかできなくて。」

「なるほどよく頑張ってるな。究極技法と言われるだけはあるな。よし俺もやっても見よ。」

えーと、右手に魔力、左手に気、合成・ググググ

「タカミチ、ちゃんと鍛錬して…マギは何してるんだ？」

「えつとですねガトウさん、マギさんが咸卦法をしようとしたのですが…」

「小癪な魔力や気風情で俺に逆らうだと。」

「いやさすがにそれは無理だろ！滅茶苦茶に反発してるし！」

無理、フッフ自重を無くした俺に不可能はない！

「グウおさまれこの野郎！よし出来たぞ！タカミチこれが咸卦法だ！」

「すごいこれが咸卦法…」

「うんなわけあるかー！…！」

「いやできちゃったし。まぐうことなき本物だ！」

「認めない認めないぞ！……究極技法が究極技法が。」

あらあら現実が見れないなんて子供だなガトウは。それからしばらくガトウが口を聞いてくれなかった。

それから数日後、ガトウから連絡があった。俺達紅き翼は本国首都まで呼ばれた。

「ついに認める気になったかガトウ。」

「誰が認めるか！…ふうまったく。今日は合わせたい人がいるんだ。」

「なんだお前の彼女か？勘弁してくれ。ラブラブなのはナギとサーシャで十分だ。」

「いや、俺達別にいちやいちやしてねえし！なあサーシャ。」

「いあん、そんな、私とマジがいちやいちや何て。これってお兄さん公認ですか！？」

「「・・・」」

結果女はたくましいと言うことがわかりました。

「うんっ、でいつまでここで待っとくんだ？」

「いやそろそろ来られるとおもんだが……………今回は何でも紅き翼ではなくお前直々への要請でな。」

「俺!？」

「そうだ」

「マクギル元老院議員！」

爺指名とかないんですけど

「いや。わしちゃう。主賓はあちらのお方たちだ」

ほっ俺個人への指名が爺さんじゃなくてよかった。本当にテンションダダ下がりだよ。

「ウェスペルタティア王国……王位継承権第一位アリカ王女」

うん、これは逃げたほうがいいね。おいジャックその女には近づくな！

「これはこれはお美しい。俺は傭兵のジャツ」「気安く話し掛けるな下衆が」ク……………」

君の尊い犠牲に感謝する。

「お、おいガトウ、俺は先に帰るな。」

「はぁ？お前何言って……」

ダッ、お前の小言は後で聞く。今は逃げるのみ。

「あばよとつつあん、ぐえ。」

「またぬかこの大馬鹿者。先日はお世話になったの。」

「いやあご機嫌麗しゅうお姫様。まさか本当にお姫様とは思いませんでした。とりあえずなぜ私の襟首をつかまれてるのですか？」

ほらみんな固まってんじゃねえよ。早く助けろ、いや助けてください。

「ふふふ、貴様が転移した先は民の大勢いる場所でな、腰の抜かした妾を見てこの国はもうだめだと民衆が叫びだし、その收拾でかなり疲れたのでのお礼じゃ。」

「いやお礼とかいらないから。てか絶対まともなお礼じゃないよね。何剣出してるのかな。いや、や、やめてえー！！！！」

それからあの恐怖鉄仮面女王の制裁を受けた後、紅き翼はアリカ姫の協力者として戦争終戦に助力することを約束、サーシャとは幼馴染らしく結構話していた。かくいう俺もいろいろと質問されたり愚痴を聞かされたりした。王室って大変なんだね。てか少しはにこりとしろ。せっかくの美人が台無しだぞ。

アリカ姫の調査結果…彼女はツンデレ、リンデレではなく、ツンドラという極寒地帯であった。

王女との会談から数時間後、現在俺たちは酒場で夕食をとっている。

「ワハハハハ。上手いことやりがってこんガキヤ！」

「ああ！？何の話だ！？」

「とぼけんじゃねーよ。お姫様とイチヤイチヤキヤイキヤイおしやべりしてたろーがッ！」

「お前はあれがイチヤイチヤに見えたなら眼科に行くことをお勧めするよ。」

「なーに言ってたんだよ俺なんかお姫様には「気安く話しかけるな、下衆が」だぜく？・・・いや、ありゃイイ女だぜ。一本芯の通ったな」

「ははは、俺はボコボコにされたんだぞ。あんなおっかな鉄仮面が好みなんてジャックはマゾなのか。」

「グハハハハ。そーゆートコはまだまだカワイイガキなんだよな、てめーはよ」

「んっだ、そりゃ。意味わかんねえ。触んなっつーの。俺にはそんな趣味はねえ。」

その日は夜遅くまでジャックにいじられた。ムカついたのでジャックが酔って寝ている間に竜種がいる森に転移した。翌日かなり本気のラカンパンチを喰らったのはきつかった。

s i d e o u t

おまけ・・・

酒場でマギとジャックがのいざこざを見ていた詠春たち

「仲いいな」

「そうだな」

「ナギまた野菜残してるじゃない。ちゃんと食べなさい。」

「うつせえよサーシャ。お前は俺の母ちゃんか!？」

「いいえ、嫁です!」

「認めねえよ！」

「仲いいな」

「そうだな」

ハードボイルそれは孤高。だがたまに一人が寂しくなるらしい。

詠春とガトウの後姿を見たタカミチとクルトは将来早めに彼女を決めようと思ったらしい。

その願いが叶わず同じ道を歩むことまだ彼らは知らない（笑）

続く…

あの俺逃げていいですか？（後書き）

アリカさんは最強か！？たぶん最強です（笑）

主人公の唯一の天敵です。彼女には勝てません。

次回、お外に連れて行かれます。

お楽しみに。

デート？いえ連行です！（前書き）

久しぶりの投稿です。

なかなか書く暇がなく大変でした。

では駄文ですがお読みください。

デート？いえ連行です！

side マギ

どーも、最近巷でファンクラブができたマギです。ファンクラブ名が『マギ様私をいじめてくださいの会』と聞いたとき割と本気で潰しにかかりました。だが、奴らには逆効果。やればやるほど、もっとやって、と言ってくる十会員が増えるという悪循環。あきらめて無視するとこれは放置プレイですかと聞いてくる始末。奴らドMこそ人類最強だと感じたよ。ちなみにナギたちはまともなファンクラブだった。俺はこの不条理を訴えたらガトウの奴に「それ、お前の自業自得だから」と辛らつな言葉かけてきやがった。まだ咸卦法のことを根に持っているのだろうか？

そんな変なイベントもあったがちゃんと仕事もしている。アリカ姫を協力者として紅き翼は戦闘派と頭脳派とに分かれている。もっぱら俺は得意分野である諜報に勤しんでいる。またバックに王族もつきお金には困らないがやはり人材不足であることは否めないが、後少ししたらこの問題もクリアーとなる。えっ何のことかって？それはまだ秘密と言っておこう。

今現在、魔法世界全土に多くの『完全なる世界』の組織の者が入り込んでいることまた糾弾しようとしてもすぐに証拠を消されてしまっていることが判明した。そのため俺は連日『色』のノアの力を使い潜入したりしてる。まあ奴さんはしっぱを全然見せないんだけどね。

で最近働き過ぎな俺は休暇を所望し、一日休みをもらった。ちなみにナギとラカンとは二人でバカンスを楽しんでやがったので、寝ている間に二人の体を密着させて写真を撮りホームページに載せた。次に日、ナギとラカンの交際疑惑が魔法世界中に轟き、サーシャが滅茶苦茶に暴れた。彼女は王族の魔力が使えるらしくかなり苦戦し、ナギの一日デート券で何とか治まった。ちなみにラカンだがその報道から男たちの視線をよく感じるようになったらしい。街を歩くときは後ろに気をつけるよって注意したら、軽く青褪めていた。ドンマイジャック、俺は君を忘れない（貴方のせいです）

かくなり話が脱線したが、今日は休みの日つまりお家でゴロゴロの日なのだ。そう思い愛用の枕を手にしさあベットにダイブッ

「マジ、今日は外に視察に行くぞ。」

出たよ、この鉄仮面女王。なんでいつも襟首引っ張んだろ？

「だが、ことわ……………すんませんついでいきます。」

隊長、あの目は無理です、殺されます。彼女はツンドラ、調査結果は間違いありません。あの視線アラスカのほうが暖かい。いや行つたことねえけど。

「ほれ何をしておる。さっさとこんか。」

「へえへえただいま。」

はあ休日返上で姫様護衛かよ。さらば俺の愛しき枕よ。

そう思いながら彼女についていくのであった。

side out

side サーシャ

「へえ、あのアリカが…」

「うん？どうかしたのか、サーシャ？」

「え、あーあのね、アリカっていつも一人で何でもしちゃうっていうか、あまり他人に頼らないのよね。だから、アリカが他人に話しかけたり頼みごとをするのって珍しいのよね。」

本当に珍しいことよ、あのアリカが他人と一緒にいようとするなん

て。まあ彼女の環境も問題があったんだけどね。ふふふこれからが楽しみだわ。

「襟首引っ張りながら、命令口調だぜ。あれのどこが頼んでんだ？」

「はあ駄目ねナギ、ほんと貴方は女心がわかってないわ。」

「いや、俺はそんなのどうでも・・・はいおっしゃる通りです。」

うんうん素直でよろしい。かなり重要なことなの私には。早くあなたが私の思いに気づいてくれるのを待ってるわ。

side out

side マギ

「あれはなんじゃ？」

「はあ！？ソフトクリームも知らないのか？」

こりゃビックリ、どんだけお嬢様なんだ。（一国の王女です。）

「はあ、ちょっと待ってろよ。・・・おじちゃん、バニラ二つ頼むは。」

「おう、毎度。あんちゃんもあんな別嬪さん連れてデートなんて隅に置けないね、このこの。ほれ一つはサービスだ。」

「ありがとな、て彼女じゃねえから。」

くそお、あのオヤジなに微笑ましいげに見てやがる。い、いや確かに美人だがそんなじゃないし、って何考えてんだろ俺。

「ほれ、食べてみな。」

「ふむ、スプーンがないぞ?」

Oh baby! この子はマジでいいとこの御嬢さん(さっきから王女と言ってます)

「あのな、こういう時はパックってかぶりつきゃいいんだよ。」

「なっ！それは王族として！」

「今は誰も見とらんでしょうが。ほれ早く早く。」

「わ、わかったからそう急かすでない。アム、ん甘い！？」

そりゃ、ソフトクリームですから。てかこいつが笑うの初めて見たな。いつもこれくらい愛想があるといいのに。

「これをアスナにも食べさせてあげたいのじゃが…」

いきなりヘビーな話題ですね、はい。はあさっきまで笑ってたくせに急に暗い顔しやがって。忙しい奴だよまったく。

「なら、さっさとこの戦争を終わらせますか。そんでもって三人で買い物しながらソフトクリームでも食べますかね。」

俺がそういうとアリカ嬢は少し驚いた顔した後すぐいつもの能面に戻った。ただ少しだけ嬉しそうに見えたのは間違いないと思う。

あの会話の後、軽くショッピングしながら街の様子を見ていたのだが、さっきから俺たちを付けている奴らがいる。

おいおい、こんな街中で魔力を高めてまさか撃ってはこないよな。

「アリカ嬢逃げるのぞ！」

「な、なんじゃ急にマギ!？」

悪いがいまは答えている暇はない。やべえなこりゃ、間に合わないかもしれない。ノアの力を使うかどうか。

「ええい、ままよ！」

俺は『夢』の力を使い空間移動した。うわ、マジで撃ってきたよ。まあ奴さんには追跡用の魔法をかけたし跡は追える。まずはアリカ嬢の安全確保だな。

「おい、アリカ嬢、一度お前をナギたちのところに跳ばすからよろぐえ。」

またこいつは俺の襟首引っ張りやがって。なんか俺の襟首に恨みあるんすか、あゝん？

「妾もつれて行け。」

「はあ!？ お前何言って…」

「忘れたのか、妾の力は役に立つぞ。」

「自意識過剰じゃね。わ、わかったわかった、だからその剣を引いてくれ。いやマジ首の皮が切れてるゝ!」

そんなこんなでアリカ嬢を連れて行くことになった。いやあほとんど彼女が施設潰しました。あれは絶対ストレス発散だったと思う。怖くて言えないけど・・・

s i d e o u t

s i d e ガトウ

「まさかここまでとは。」

俺はマジが集めてきた情報を整理しているのだがとんでもない大物まで組織に絡んでいることが分かった。

「うん？どうしたんだガトウ？」

「ラカンか、この情報が確かかどうからんから外では言わないでくれよ。」

まあラカンのことだ、意味は分らんだろう。でもまさか連合のトップ2が奴らの組織に入っているとは。

「これは相当やばいな。」

ヒィー、ドツカンッ！！！！！！！！

「いったいなんだ。」

「街で攻撃魔法が使われたらしい。」

「それにあっちのほうは今日アリカたちがいるは。」

「なんだってそれじゃアリカ様は！」

これはとんでもないことになった。いまアリカ様を失うと今まで抑えられてきた国家間の争いがさらに激しくなる。

「まあ大丈夫だろ。」

「何をのんきなことを言ってるんだ、ナギ！」

本当だぞ、ナギ。今の発言は不謹慎すぎる。

「はあ落ち着けよ詠春。一緒にいるのがアニキだぜ。」

「「「あっ」」」

「そう、あのアニキがまず俺たち以外に下手を打つことはない。」

確かにそうだな。連合の魔王と呼ばれているマギが遅れをとることはない。ただ・・・

「ただ、相手が不憫だな。」

「「・・・」」

俺の言葉に一同無言だった。

沈黙は金、昔の人は偉大な言葉をのこしてくれた。

s i d e o u t

くおまけく

「はあじゃ帰りますか、姫様。」

「ふむ、よいぞ。」

次の日の朝、肌の艶々な女性と目の下にクマをつくった男性がいた。

「俺の休日、c o m e b a c k ! ! ! ! !」

マギの休みは遠い………

続く…

デート? いえ連行です! (後書き)

いやぁマギドンマイ(笑)

最近いじめられてばかりですが、ドSは打たれ弱いですね。

次回はフェイト君初登場。お楽しみに。

どうやら嵌められたようです（前書き）

久しぶりの投稿。

まだまだ文才が足りません。

しかし頑張って書きました。どうぞ読んでください。

どうやら嵌められたようです

side マギ

「お前は何を考えてるんだ、マギ！」

やつほー、現在進行で詠春に怒られているマギだよ。昨日の朝帰りのせいか、紅き翼のお父さんポジションの詠春君がきれるきれる。しかも姫さんと一緒に施設潰していたって言ったら顔の表情が無くなりました。

「いやな、俺は戻れって言ったんだよマジで。だけどあの能面鉄仮面王女がいうこと聞かなくて、てか施設の九割はあいつが壊したんだぞ。」

「嘘をつくな！どうせお前のいかがわしいあの溶ける魔法で壊したんだろうが。」

「嘘じゃねえーし。だいたい溶ける魔法は人畜無害じゃねえか。」

「被害者はたまったもんじゃないだろう！」

「ああ〜うつせえうつせえ、細かいこと気にすんなよ詠春。だからてめえは禿てんだよ。」

「誰もはげとらんわ!!!!」

詠春の一番の怒鳴り声が炸裂。お前やっぱ氣にしてんじゃねえか？

「どうせ貴様が無理矢理連れ回したんだろう！姫にこんなご迷惑をおかけするとは。どうお詫びすればよいか、国際問題級の・・・」

ハア〜なげえ〜

「詠春さーん」

ん？タカミチとゼクトか。

「あのコワイお姫様が今、廊下で僕に向かってニツコリ・僕ビツクリしちゃって・あ、なんかマギさんにお礼を伝えて、だそうです。確かに笑いましたよねっ」

「うむ、驚いたのじゃ」

ふふふ、詠春ドッヤ！

「そのムカつくドヤ顔やめろマジ。斬りたくなる」

「おいおいお前は辻斬りかよ。まあこれを見なつて。」

そういつて俺は昨日潰した施設から出たデータファイルを取り出す。

とりあえず硬直してる詠春と後ろで笑いをこらえてるアルを無視してガトウにファイルを渡す。

「・・・」

中身を見たガトウは目を大きく見開いて驚いている。そらそうだ、自分の所属してる連合のNO2があちら側とつながってるんだからな。

「これで戦争を終結できる。」

俺はそう思っていた。この組織がどれほど根深いものか知らず。

s i d e o u t

s i d e アリカ

妾は今帝国の第三王女との会談に向かう船の前にいる。秘密の会談に加え武力を伴う紅き翼を連れて行くわけにはいかん。正直心細い。

「マギ・スプリングフィールド………」

とっさに出たのは王女である妾に対して対等に話しかける男の名前だった。最近物思いにふけると大体が奴のことを考えている。この前奴が他の女を見ていたときつい魔力のこもった拳をふるってしまった。最近自分の気持ち揺れる。この気持ちがなんなのかまったくわからない。

「なんだ、呼んだか？」

妾はとっさに後ろを向くとそこには少しとぼけた顔をしたバカがいた。

「なんじゃ、バカか………」

「えっ、なんで俺が馬鹿なのよ。」

「馬鹿は馬鹿じゃ。」

「お前なんか俺に恨みがあるのか。」

ふむ恨みなら跳ばされたこととか跳ばされたことか・・・

「なんかすまん。だからその黒いオーラをしまつてくれ。」

「ふん、それでお主は何しに來たのだ？」

「ああ、一応見送りにな。それにしても良くやるな。戦火の中、こんなボロ舟で帝国第三皇女と接触しにいかうってんだからな。」

「なんじゃ、心配しているのか？」

「自意識過剰乙、ブベラッポ!？」

渾身の右ストレートは愚か者の頬に叩き込まれる。なんでなのかわ

からぬが、なぜか胸の奥が痛かった。

「はあ冗談だって。ほれこれを持っていきな。」

殴られた奴が持ってきたのは水晶のついたネックレスだった。

「なんじゃこれは？」

「それはお守りみたいなもんさ。まあもらっとけて。じゃあ氣をつけろよ。」

奴はそういつてほかのメンバーたちのところに戻っていった。

妾はそのネックレスをかけ水晶を両手で胸の前で包み込んだ。なぜか先ほどの痛みではなくとても満足した氣持ちがした。そんな氣持ちで妾は船に乗るのだった。

side out

side マギ

『あの執政官がテロに関与！？確かなんだね、ヴァンデンバーグ元
捜査官』
コンスル

「ハ。確たる証拠があります」

『よくやった。これで上手くいけば・・・これ以上の無意味な戦線
拡大を止められるやもしれぬ。弾劾手続きだな。法務官を呼ぼう。
証拠の品とナギ君を連れてきてくれ』
ブラエトル

「了解しました」

そんな会話をしながらガトウたちは動く。そんな中俺はというと・・・

「マギお前は謹慎だ。」

この禿に謹慎処分を言い渡された。

「だが断る！」

「それをさらに断る！」

ぬっ、詠春のくせにやるな。

「まあまあマギ、ここの警備が誰もいなくなってしまいます。タカミチ君たちだけでは心配ですし。」

「はあ、わかったよ。」

「じゃあよろしく願いしますね。」

そういつてナギたちは出て行った。さて俺も動きますかね。

「あれどこに行くんですか、マギさん？」

「ちょっとな、嫌な胸騒ぎがするんだよ。」

「でも謹慎だって」

「タカミチこれからいうことをちゃんと聞いとけ」

「は、はい」

タカミチは俺の真剣な顔を見たためか少々強張っている。

「ルールは破るためにある（キリッ）あばよとっつあん！」

「え、マジさん行ったら駄目ですよ！しかもそれダメ人間発言じゃないですか！」

そんな真面目なタカミチ君の声を聴きながら俺はマクギル議員の部屋に跳んで行った。

数時間後、ナギと白い髪をした青年たちが闘っているのが見えた。とりあえず乱入するか。

「あゝあゝ（ターザン系）、チース三河屋です。」

「「「!!!」」」

おおみんな一斉にこちらを向いてるね。

「マジ、お前なんでこんなところに。」

「細かい話は後でいいだろ。それよりこちらのお客さんは？」

「アニキ！こいつらは敵だ。マクギル議員に化けていた！」

ほう、ということは・・・

「お前らが『完全なる世界』の幹部か。よしここで捕まえるか。」

「ふふ、君が『紅蒼の魔王』か。報告通りぶっ飛んでいるね。」

「はあその厨二全開の二つ名を言わないでくれ。で捕まってくれるか白もやし。」

「し、白もやし・・・お、面白いこと言うね君は。残念だけど君たちにはここで退場願うよ。わ、わしだ！マクギル議員だ・・・うむ、反逆者だッ！ああ、うむ、確かだ。奴らに暗殺されかけたっ・・・は、早く救援を頼むッ。スプリングフィールド兄弟、ラカン、ヴァンデンバーグ。奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ！今も狙われている。軍に連絡をッ・・・」

「げ」

「ああーあ」

「やられたな」

ちっ、こういう手に出たか。このまま逃げるにしても一つ爆弾落としてやらないと気が済まない。

「おい白もやし、一つ質問いいか？」

「ふっ早く逃げなくていいのかい？まあいいよなんだい？」

「なに簡単なことさ、この幻想はいつまで続く？」

「！」

「おうおう、その顔ですべてわかったよ。この魔法世界に来てからの疑問がやっとな。じゃあな憐れな人形。」

「ま、待つんだ！」

そういつて俺は転移してその場を後にした。

「それにしても姫さんがやばいな。」

「そうだな俺達も英雄から反逆者だしな。」

「ははは、これだから人生ってのはおもしろえ。」

ホントこいつらのんきだな。焼くぞコラ。

「「「!!!!」」」

ナギたちは言い知れぬ圧力にビビっている。

「とりあえず姫さんたちを助けに行って隠れ家に行こう。」

「「「サーイエッサー!」」」

なぜか軍隊になっていた紅き翼の姿がそこにあっただった。

ここから物語はさらに加速する。

s i d e o u t

続く…

どうやら嵌められたようです（後書き）

マギ君は魔眼を持っていますから最初からこの世界が人工世界だと気づいていました。

次回は一気に最終決戦前にいこうかと思っています。

よろしく・・・

俺は主従の誓いをする（前書き）

今回は夜の迷宮からの奪還です。

主人公がこの一年半何をしていたかわかります。

どうぞお読みください。

俺は主従の誓いをする

マギ side

あの後俺たちは会談が行われている夜の迷宮へと急いだ。案の定姫君は敵に捕まっていた。奪還のための作戦を考えようかと思っただ、あれくらいの規模ならすぐに済むとナギが突っ込んでいき結局正面突破となった。まああいつの場合アリカ姫に付いて行ったサーシャが心配なんだろう。ラカンがそんなナギをニヤニヤと見つめている。間違いなく後でいじられるだろうナギに少々哀れんでしまったのは言うまでもない。そんなこんなでほとんどの敵をナギがぶっ飛ばしていくのですごく救出は楽チンだった。さすが人型最終兵器は伊達ではない。

そんなこんなで現在俺たちは隠れ家に来ている訳なのだが

「何だ、これが噂の【紅き翼】の秘密基地か！どんな所かと思えば掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何を期待してたんだ、このジャリはよ」

まあぼろいのは否定できないけど。

「何だ、貴様、無礼であろう」

「へっへーん、生憎ヘラスの皇族にゃ貸しはあっても借りはないでね」

「何い？貴様何者だ」

ラカンさんよおゝ大人気なさすぎだろ。

「あのやけに元気な少女が・・・」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね。アリカ姫との交渉の為に出向いた所と一緒に敵組織に捕縛されていたのです」

本当に元気だね。若いていいな（貴方も十分若いです）だけど今はそんなことは言ってられない。

「さーてアリカ嬢、助けてやったはいいけど、こっからは大変だ。連合にも帝国にも・・・君の国にも味方はいないぞ。」

「恐れながら事実です。王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で・・・最新の調査ではオスティアの上層部が最も「黒い」・・・という可能性さえ上がっています」

「やはりそうか・・・我が騎士よ」

「なあさつきから思ってたんだけどなんで我が騎士なんだ。クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？ジョブチェンジなんですか、そうなんですか？」

この姫さんは助けてからずっと俺を我が騎士と言ってんだけど誰か意味を教えて。こらみんな無視しない。特にナギとサーシャ、二人で甘い空間出すな！ナギもげろ！（お前も、もげろ）

「もう連合の兵ではないのだろう。ならばお前は最早私のものだ」

「な・・・」

とんでもない暴論ぶっ飛ばしてくるな。さすがだ、しかも一歩間違えれば告白にもとれるぞ。まあこの鉄仮面がそんなこと考えているわけないか。

「連合に帝国・・・そして我がオスティア。世界全てが我らの敵という訳じゃな」

「じゃが・・・お前とお前の【紅き翼】は無敵なのだろう？」

無敵という言葉にナギとジャックが反応する。都合のいい耳だな、おい。

「世界全てが敵——良いではないか。こちらの兵は7人。だが最強の7人だ。」

ならば我等が世界を救おう。我が騎士マギよ。我が盾となり剣となれ」

「・・・はあく。だから俺は魔法使いだっつーの！・・・やれやれ、相変わらずだな姫さん。ここまで言われて動かなきゃ男が廃る。俺の杖と翼、君に預けよう」

俺は丘の上で跪き忠誠を誓う。夕日に照らされるアリカ嬢の顔を俺はいつの間にか魅入っていた。さっきの告白紛いのせいかな少し顔が熱くなるのが感じられる。

「ふむどうしたのじゃマギ？顔が真っ赤だが？」

「ふえ、いやいや何でもないぞ。・・・それより味方ならちゃんといるぞ。」

そう仲間はあるのだ。だからジャックとアルニヤニヤするな！

「はあ、そんなわけ無いだろ。俺たちで国の調査をしたじゃないか。」

「ふふガトウ、ここ最近急成長を遂げている企業名を挙げてみる。」

「総合多角会社、通称S T C。電子精霊の開発を中心とした企業のはずだ。組織との繋がりも懸念したがあそこは白だった。それがどうかしたのか。」

「まあ確かに研究もしてるだけどねそれは表の顔。裏の顔は情報屋、そして魔法世界の経済を握っているんだよ。」

「なっ！なんでお前がそんなこと知っているんだ。」

「まあ、そんなことはどうでもいいじゃないか。それで姫さん、S T Cに協力を要請するか？」

「・・・今は背に腹は変えられぬ。助力を請うとしよう。しかしお主の話しが本当ならそれほどの企業が協力してくれるのか？」

「大丈夫、大丈夫。その会長が姫さんに忠誠を誓ったんだから。」

「「????」」

みんな頭をかしげているな。いやアルビレオはわかったみたいだな。

「マギ、一つ質問してもよろしいですか？」

「なんでも聞いてくれ。」

俺がそう言うところアルはいつもの胡散臭い笑いではなくかなり真剣な顔をして尋ねる。

「STCの会長は誰ですか？」

俺はにやっと、笑みを浮かべる。あとからみんなに聞いた話によるとイタヅラが成功した子供のようだったらしい。

「それはこの俺…………マギ・スプリングフィールドだ！」

場に沈黙が流れる・・・寂しい誰か反応して！

沈黙の後、みんなは一斉に口を大きく開けた。

「「「えええー！！！！」」」

かなりうるさい。てか姫さんまで驚いてるな。レアだ、写真を撮ってよ。

「撮るな、愚か者！」

「ふんいつまでも殴られる俺では、、いやアリカさん、なんかと落としの態勢なのかな？ いや拳じゃなく蹴りなんですかそうなんですか。」

ドカッン！！！！

悲鳴を上げる間もなく地面に叩き込まれる。毎度のようにアリカに勝てないマジであった。

side out

くおまけく

夕日をバックに地面に埋まるマギ。それを見たタカミチとクルトはこう言った。

「「シュール」」

「俺はどこで育て方を間違えた？」

かなり神妙な顔している二人を見てガトウの落ち込んでいたらしい。

頑張れガトウ、君ならやれるさ（笑い）そんな電波を受け取ったガトウはさらに落ち込むのだった。

続く…

俺は主従の誓いをする（後書き）

マギえゝ何してるんですか！の巻でした。

楽しんでいただけたでしょうか。

いちよう今年の執筆はここまでにしようかと思えます。

次に会うの元旦ですかね？

それでは良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4842y/>

魔法先生ネギま！アンチなにそれおいしいの

2011年12月24日07時08分発行